データでみる軽トラ市（その11）

愛知大学　三遠南信地域連携研究センター長
地域政策学部教授　戸田敏行

軽トラ市の広がり

数年前のことであるが，中国地方の中山間部に住む恩師宅を訪ねた際に，軽トラ市の話になった。するとご家族が農業の６次産業化を進めており，軽トラ市に大変関心があるという。以前にも，こうした取り組みをやればいいと思って，役場に話に行ったが，まるで理解されなかったとのことである。どうすればいいでしょうかと問われた。私の答えは至極単純であり，それは私が知っているところで言えば，新城軽トラ市を見に行ってはどうかということである。できれば懐疑的な役場の人と一緒に，と付け加えた。

この回答には，かなりの自信がある。何故なら，新城軽トラ市の人たちも，発祥の地である岩手県雫石軽トラ市，先行していた宮崎県川南軽トラ市を見に行って，そこから軽トラ市を始めたからである。雫石軽トラ市を視察した際の驚きは，新城軽トラ市の初期メンバーから何度も聞いてきた。また，軽トラ市に関心をもって新城軽トラ市を訪れた方々も些少は見てきたからである。百聞は一見に如かずというが，兎に角，実物を見て，その話を聞いてみることが間違いのないスタートである。

○軽トラ市はどのように広がったか

全国軽トラ市の調査には，軽トラ市を始める際に参考とした軽トラ市はどこかという設問を初期から設けている。軽トラ市の出発点は，2005年の岩手県雫石軽トラ市であり，最終的にはそこに行きつくことになるが，雫石から現時点までで概ね100，途中退場を含めれば160程度の軽トラ市の系図が描けるように思っていた。多くの地域づくり事業が全国で展開されているが，ルーツから現在に至るまでの全体像を描ける事業は少ないであろう。

データをみてみよう。元祖である岩手県雫石軽トラ市，宮崎県川南軽トラ市，愛知県新城軽トラ市を三大軽トラ市と呼ぶことは，本連載の最初に述べたところである。全国調査では，各地の軽トラ市が参考にした先行例は，雫石軽トラ市が23（25%），川南軽トラ市が18（19%），新城軽トラ市が15（16%）であった。三大軽トラ市以外は12（13%）で，大半が近隣の軽トラ市をあげており，特定の軽トラ市は見当たらなかった。無回答が25（27%）あるものの，三大軽トラ市から全国の軽トラ市が派生している構造が理解できる。

次に空間の分布をみてみよう。流石に元祖である雫石軽トラ市を範とする軽トラ市は，全国に分布しているが，やはり東日本が重点となっている（図１）。次に，川南軽トラ市からの広がりは，九州が圧倒的に多い（図２）。そして新城軽トラ市からは中部を重点として

三遠南信地域連携研究センター

図１　雫石軽トラ市からの広がり

図２　川南軽トラ市からの広がり

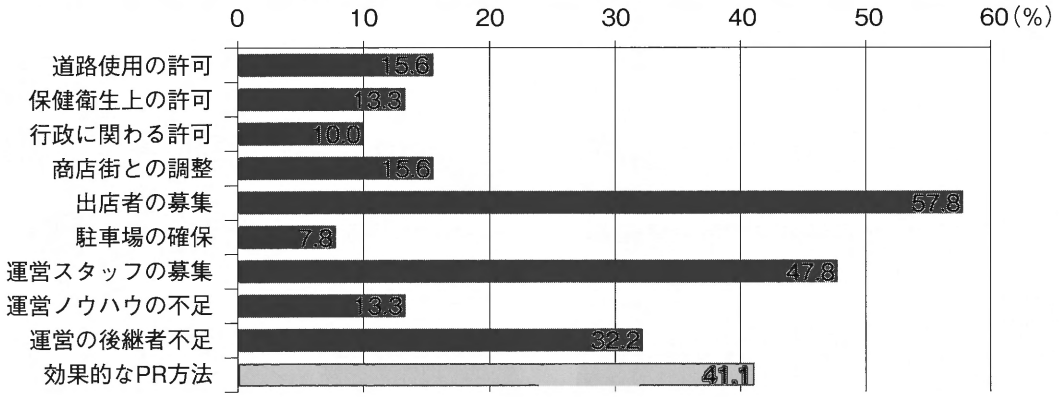
図３　新城軽トラ市からの広がり

広がっていることが分かる（図３）。これらの図から分かるように，空間的な近接性は重要な要素である。三大軽トラ市が，日本の東，中央，西に存在していることは，軽トラ市が全国に広がる上で重要な意味を持ってきた。

○視察の目的とは

参考にする軽トラ市は訪問する。固く言えば，視察している訳である。一言で視察と言っても，目的には差異がある。これまでのヒアリングでは，概ね３つのタイプの視察があるようである。これを①見学型，②課題解決型，③合意形成型と考えている。これらの定量化は本センターで研究中であるので，現段階では私見の範囲を出ないが，少し内容を紹介しておきたい。①見学型とは，明確な目的を持たずに，まあ見に行ってみようというタイプである。軽トラ市が始まった初期はこうしたタイプが多かったようだ。しかし，初めて軽トラ市をみた衝撃も大きいと言える。②課題解決型は，軽トラ市を開始する上で，ある程度課題が分かっている場合である。従って，学ぼうとする内容も絞られてくる。最後の③合意形成型は，冒頭の例にあげたように，軽トラ市にあまり積極的でないメンバーも含めて一緒に視察することで，合意を形成していくものである。かなり戦略的な視察と言え

三遠南信地域連携研究センター



※2019年11月に実施した軽トラ市の全国調査より作成

図４　運営上の課題や苦労

る。３タイプを示したが，これらは軽トラ市に限ることではなく，多くの地域事業を始める際に起こる。軽トラ市は，これらを明確化できるということである。

視察ケースは，これから軽トラ市を始めるスタートアップ目的のみならず，スタートしたのちに他事例から学ぶというフォローアップ目的もある。どんな内容をフォローアップしたいと考えているだろうか。参考に，全国調査から軽トラ市運営上の課題や苦労している点をあげておきたい（図４）。「出店者の募集」，「運営スタッフの募集」，「効果的なPR方法」などがあげられる。これらはスタートアップ時にも持つ課題であり，さらに諸許可，商店街との調整などが初期段階特有の課題となるだろう。

○軽トラ市を広げる仕組みへ

広がった仕組みが分かれば，広げる仕組みも推定することができよう。大きく分ければ，学ぶ拠点の充実，学びに行ける手段が必要となるだろう。

まず，学ぶ拠点である。これは，三大軽トラ市に既に整えられていると思える。三大軽トラ市に蓄積された内容には，実に多くのものがあり，元祖である雫石軽トラ市は15年，川南軽トラ市14年，新城軽トラ市10年の経験がある。現時点でもコロナ禍の開催などへの挑戦が続いている。また，三大軽トラ市の先導者諸氏は魅力的な人物である。やや軽い言い方かもしれないが，軽トラ市マスター，グランドマスターなど，外部から見て分かり易い肩書があればよいようにも思う。スタートアップ用のマニュアル化も必要である。そして，学ぶ拠点が継続でき，量的にも拡大できる仕組みも重要であろう。

次に，学びに行ける手段である。これには，どこに行けば何が学べるかの情報，そして視察費の支援も必要だろう。軽トラ市自体は，財政的にも自立性が高い事業である。しかし，スタートアップ時点では，こうした資金に窮するケースもあるように思う。呼び水としての支援は，必要だろう。２月号に，100の軽トラ市を1000にと書いたが，15年前に岩手県雫石町でスタートした軽トラ市が，コロナ禍を乗り越えて，軽トラ市を必要とする全国各地に広がっていくことを期待したい。

三菱商信地域連携研究センター